

若き日の夏の思い出

私が住む相模湖町の町域は、明治22年の町村制施行により小原町、与瀬駅、千木良村は小原町外1駅1ヶ村組合をつくり、寸沢嵐村、若柳村は合併して内郷村となりました。与瀬駅は大正2年与瀬町と改称、そのため、小原町外2ヶ町村組合となり、昭和5年与瀬町外2ヶ町村組合と改称。同30年に与瀬町外2ヶ町村組合に属する2町1村と内郷村が合併し、相模湖町となりました。【「神奈川県地名」(日本歴史地名大系14 平凡社)499ページに拠る】。この内郷村の中に奥畑、若柳、阿津、山口、鼠坂、関口、増原、寸沢嵐、沼本、道志などの地区があり、私が生まれ育った神奈川縣津久井郡内郷村道志は里山に面した、生活するのにいちばん不便な所でした。先祖がこの里山に住み着いた時代から自給自足の生活が続き、どうしても生活に必要な物資の調達には遠くまで買い出しに出掛けなければなりません。住民の大半は買った品物を入れる竹かごを背負い、道志川を渡って川和(現在の津久井町中野)へ足を運びました。酒類は西澤商店、金物は鍋屋金物店、衣類は川和の数少ない呉服屋、洋服屋で買入れ、その他は八王子、立川、東京方面へ出掛けました。遠方まで買い物に出掛けるときは4kmから5kmもの砂利道を、バスもありましたが、本数も少ないので、足入れしたばかりの革靴のつま先とかかかとに鋏を打った靴を砂利道の為、鋏の音が砂利道に心地良く、楽しみながら歩いたものでした。

我々の青年期、特に戦前・戦中から戦後の激動の時代にはこれといった娯楽施設も少なかったのですが、中野の津久井警察の近くに中野劇場という映画館があり、日活映画が多く上映されました。この劇場は昭和18、9年に浅草にあった芝居小屋を譲り受けて再建されたそうです。再建された当時はサーカスや浪曲などの公演で人気を博し、のちに「二十四の瞳」「鐘の鳴る丘」など二本立て映画を上映しました。観客の中には小中学生も少なくありませんでしたが、大人に最も人気があった映画は「君の名は」だったそうです。満員の日が多かったため、ある日二階の観客席の床の一部が壊れたことがありましたが、幸いけが人は出ませんでした。また、串川の中央辺りにも串川劇場という映画館がありました。

場所は現在のみのわ自動車の向かい側、小嶋繊維工業の工場の辺りで、昭和18、9年に開場し、昭和32、3年に廃館となりました。開業当初はテレビも無かった時代で、劇場はいつも満員でした。コロムビアトップ・ライトや岡本敦郎などの多くの有名人も出演し、ワイド画面のシネマスコープによる二本立て映画も上映しました。鳥屋には「昭和館」がありました。その名の通り昭和の初めに作られ昭和30年頃まで地元青年団員による田舎芝居や娯楽会が開かれ、また、「愛染かつら」などの人気映画も上映され地元の人たちが楽しみました。2階建てで収容人数は300人ほどでした。

道志集落で便利な乗り物と言えば自転車くらいなもので、若い人が夜遊びに行くにも大部分の人は歩いて行きました。集落内にも駄菓子屋が2軒あり、飴玉、駄菓子、トコロテン等を爺さん婆さんで売っていました。

集落内には「道志倶楽部」という会議をするために使う施設がありました。70～80人も座れる集会所で、当時は男の人だけの集まりが多く、コシカイと呼んでいました。夜になると若者が集まっては景品が当たるアミダクジを作り、楽しんだものでした。その当時は遠方まで仕事に行く人も少なく、遠くても女性が半原方面の機屋(はたや)や燃糸工場へ働きに行く程度で、男性は農家の暇な時は土木作業や山仕事の手伝いをしました。そのため青年団活動も活発に行われ、団員は男女合わせて20～30名もいました。男女を問わず一年中遊びもあまり無かった時代で、夜になると用事のない若者が倶楽部に集まって来て、冬場は炭火のコタツに入り、夏場は火の無いコタツに足を入れて雑談などして楽しみました。コタツには14～15名は入れた。毎晩のようにいっぱいになり、コタツに入るのにも男性は好きな女性の向かいに、女性は自分が好む男性の真向かいに座るように心掛けました。その結果、大体同じような組み合わせになることが多かったが、集まった男女は雑談で夜の更けるのも忘れ、語り明かすことも少なくありませんでした。

ある夏の晩、こんなエピソードがありました。

今夜は川和の中野劇場に「君の名は」を見に行くか、串川劇場へ行くか、夏のお祭りシーズンだからお祭りを見に行くか、どれかにしようという話になり、あっちかこっちかそれぞれが決める段になりました。若い人の集まりですから、映画に行くかお祭りに行くかを自分好みの異性と示し合わせたいと思うのも無理からぬ話。そこでコタツの中で足を使った争奪戦が始まります。男性は自慢の長い足を伸ばして向かい側に座っている好みの女性の足を優しく蹴り、相手に自分と一緒に連れてくれるよう意思表示。目が合えば成立です。ところが、綺麗な女性の足には何本もの男性の足が集中し、当の女性はどの男性の足からの伝達なのかよくわからず、困った様子。もっともこれは、決め事になったときによくあるケース。私の向かいの男が私の隣に座っている女性の足と私の足を間違えてシグナルを送って来たので、意地悪く私が女性の足になりすまし、足で小さく蹴り返すこともありました。その男性が自分好みの相手に気持ちに通じたと勘違いして喜びの顔になったのは言うまでもなく、私は笑いをこらえるのがやっとでした。そんなことも遊びになる時代でした。さて、しばらくして皆が自分の行く方向を決め、まず一人の男性がコタツから立ち上がり、「映画を見に行く人は」と声をかけました。私も中野劇場での映画鑑賞を希望していたので立ち上がりました。

7～8名で倶楽部を出発したものの、当時の道は前にも迷べたように生活物資の調達の為に人がやっと歩ける程度の曲がりくねりの多い山道。先頭の人が持つ懐中電灯だけの明かりを頼りに山道を降り始めて間もなく、メンバーの1人が大声で「おいおい下駄が片方ない。石に躓いて藪の中に落ちて見つからないぞ」と騒ぎ始めました。そこで全員でついたり消えたりする懐中電灯の明かりを頼りに1時間も探しました。やっと、手探りで探していた仲間が「あった」と大声を上げ、一件落着。ようやく山を下りやっと川に出たら、そんな時にかぎり、4～5日前に降った雨により集落の方々が買い物に行く為にと苦勞して作って置いた木製の橋が増水により流されていました。みんながっかりです。ところが、仲間の男性の1人が「川まで来たんだし、川の水もあれから4、5日経って少なくなっているから、浅い所を選んで上流から下流にかけて歩いて行けば渡れると思うよ」と、いつも川を渡り慣れている為強気な

ことを言い始めました。そんな話をしている時、水辺に近付いた女性が「なんだか川の方でスイカのような甘い匂いがする」と騒いでいます。その話を、物知りの親を持つ男性が聞き付けて一言。「この甘い匂いはね、アユのせいだよ。この道志川の急流を上って来るアユは流水が強いから、鼻が曲がっているのが特徴なんだ。こんなに強くアユの匂いがするなんて、遠方からの太公望(釣り人)なら涎を流して喜ぶ話だ」と親譲りの博識(はくしき)ぶりを披露しました。そして、「今夜はアユもいっぱいいるようだから、川を越すのに跣(はだし)で水に入ったら、魚が足の裏にもぐって来て滑るので注意すること」と付け加えました。しかし、女性たちは水を怖がり、「無理じゃないか」などと言葉を交わしていましたが、中の1人が「それなら男性が女性を負って渡れば」と提案。残りの女性も「それなら」と賛成しました。

こんないきさつで私も先輩の女性を負うことになりましたが、団員の中では若輩なので人生経験もとぼしく、責任感とドキドキ感とでこの時ほど異性を意識したことはありませんでした。そんな複雑な気持ちを抱えて川の中程の所まで来た時、あんのじょう私の足がつると滑り、負っていた先輩を川の中にドブン。下半身びしょぬれとなり、先に渡り切っていた仲間がこの異変に気付く、急いで駆け寄って来てくれ、とりあえず助かった。やっとのことで全員が渡り切り、私は先輩に申し訳なく思い「大丈夫ですか」と話し掛けると、弱々しく「大丈夫」と返事が返って来ました。この先輩女性にしてみればそう答えるより仕方がなかったのかも知れませんが、幸いにして薄地の服だったので本当に大丈夫だったのかも知れません。

やっとのこと劇場に到着すると満員でした。でも大変な思いをしながら来たのだからと、男性が先頭に立ち女性は男性に手を引かれながら中の方へと割り込み、ようやく両面の見える場所にたどり着きました。それでも身動き出来ない程の混雑でした。やがて映画も始まりましたが、途中で映写機のフィルムが何度も何度も切れました。それでも当時の若者はじっと待った。これも娯楽なのだ。やがてフィルムも繋げたのか館内の電灯も消え、上映が再開されました。ちょうど、川で足を滑らせて落としてしまった先輩がとなりにいた

ので、小声で「どうですか、少しは乾きましたか」と話し掛けると、満員の熱気が幸いしてか、「お陰様でほとんど乾きました。大変ご心配かけました」との一言が返って来たので安心しました。

そして映画が終わり、我々一行が来た道を雑談しながら戻る途中、私が来る時に川で滑ったことが話題になり、帰りは別の場所を渡ることになりました。いよいよ川に到着。こんどは絶対に落とさないと気を引き締め、私たち全員無事に川を渡ることができました。次はまた、難所の山道です。そんな時に限って懐中電灯の電池切れ。それでなくても暗い山道は真っ暗になりましたが、くねくねと曲がりくねった山道を全員が手をつなぎ、藪の中に落ちないように注意しながら人家のある頂上を目指しました。すると、中腹辺りで仲間の一人が向かいの山の中腹を指さして「あの明かりは何の明かりだ」と叫びました。全員が立ち止まってその方向を見ると、なるほど明かりがいっぱい動いているように見えました。仲間の一人が「あんな所に家はないはずだ」と言い出し、「お祭りではないか」「もう夜もこんな遅い時間なので、それはない」という会話もありました。そんな時、例の物知りの親を持つ仲間の一人が「あれはね、年寄りから聞いた話だが、多分キツネの嫁入りだと思う。カップルが体がふれ合う時の静電気のいたずらだよ」と説得力のある話をしました。その話に全員納得し、また山道をたどって、集落に帰り着きました。里山ではキツネ、タヌキ、シカ、イノシシ、クマなど数多くの動物が夜になると行動を開始します。

この里山に代々住み慣れています、初めに記したように不便さもありますが、買い物に行くのにも山道を歩いて遠方まで出掛けなければなりません、また若い人が遊びに出掛けるのにも山を越え、川を跣で渡り5kmも6kmも歩きますが、それでも、遊ぶ相手が待っていると思えば心が弾み、よく出掛けました。都会では想像も出来ない体験と思い出がいっぱいです。

また、子どもの頃の遊び相手は「三太物語」(青木茂作)の三太と同じカエル、ヘビ、カメなどでした。釣りやトンボ取り、ホタル取り、篠竹で作った自作の紙デッポウなどでも遊びました。急な坂道を利用して乗る木製の手づくり乗り物も自信作でした。輪切りにし

た木をタイヤ替わりにして、油のあまりない時代のことですから、松の根から絞って作ったショウコン油をタイヤの軸に塗りつけて回転が良くなるよう工夫したり、カジ取りも自由に出来るように組み立て、ブレーキも取り付けて、友達と走る距離を争ったりしたものです。こんな山奥でも、里山だからこそその楽しみもいっぱいありました。

『うさぎ追いしかの山、コブナ釣りしかの川』という歌の情景そのまま、自然豊かな道志の里山。清流道志川のほとりで子供の頃から心に刻んだ思い出は、自然児三太の活躍と重なり合い、「三太物語」を読むと、自分が過ごした子供の頃の日々を思い出します。著者の青木先生に感謝したいと思います。

なお、本稿作成にあたり、中野の大塚富士雄さん、串川の伊従恒文さん、門倉敏明さん、鳥屋の佐藤文市さんに多くのご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。また、各地の劇場についての記述に誤りがある場合、その責は私一人にあることを申し添えます。